連載62 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（64歳・内科）

在宅患者さんは霊能者（拝み屋さん）だった。

私は日ごろ、在宅医療で終末期や看取りの病状に出会う毎日です。まさに生と死の狭間（はざま）なのです。臨死体験などの神秘的な世界や死後の世界など、昨今マスコミで特集を組んだりしていますが、これも時代の写し絵なのでしょうか。

10年前のことです。老人デイケア患者さんで在宅患者さんでもあるA子さん（78歳・女性）は、脊柱管狭窄症で腰痛が激しく、寝たきり傾向にありました。A子さんは、ほかの患者さんにとっては、拝んでもらうとピタリと当たるといった噂（うわさ）のある、地域では以前から有名な霊能者だったのです。そこで私は、ライフワークでもある霊能者の確認と学術的考察を加えることにしました。

当院の関係者に、以前あらゆる不幸が訪れ、苦悩を繰り返していた人物がいました。世間一般によくある話のように、起業の失敗、金銭難そして人間関係もこわれかかっていたのです。本人の人間性（魂）は良いのですが、生来、事業にはまったく不向きで頑固な技術者なのです。そこで、A子さんに拝んでもらいアドバイスをもらうよう、彼に協力を依頼し、その能力を確認したかったのです。

結果、彼の背中には、弓矢に刺さって真っ赤な血に染まった3人の落ち武者が死んでいる姿が見えたようです。至急、拝まなければ、近い将来生命に関わる大病になるところだとのことでした。その後、改（あらた）めて彼の先祖のルーツを辿（たど）ってみると、戦国時代に負け戦で命からがら山奥に落ち延びた武将だったということがわかったのです。この事実をどう思うかは別として、現在、彼は人生の危機を脱し、安全走行の人生を歩むよう心がけているそうです。

現在、“空”とか“無”を大切にしている仏典「般若心経」をも科学する時代にあります。

“空”とは、物事の成り立ちの“元”を表し、現代の科学研究による超弦理論の世界かも知れないし、“無”とは、形あるものも、実はあるとも言えないし、ないとも言えない。

今回のお話の霊感については、古く原始時代の人間以外、は虫類にもあり、大脳辺縁系の刺激によってもたらされた神経物質分泌による感覚であると、某ノーベル賞受賞学者は論じています。

見方、考え方により変化し、リアリティーとバーチャルに集約されつつある現代には必要な概念で、本来は想いと行動で現実となるといった考え方のヒントにもなります。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 19名
（常勤6名、非常勤13名）
内科・外科専門医 16名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設！

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する
臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/